令和５年度幼稚園学校評価（長浜幼稚園）

分　　野	評価項目	評価の着眼点	自　己　評　価 達成及び取組状況	評　価	学校関係者評価 評　価	評価結果を踏まえた今後の取り組み
教育課程・指導	①学年・学級経営	教職員は、教育目標の達成を目指した学級経営を行っているか。	○合言葉「なかよく　がんばる　はっぴぃ　まるまる」が子供たちに定着しており、子供たちと共に日々の生活の中でも大事にしながら学級経営に努めることができた。 ○教育活動の中から園児の「幼児期の終わりまでに育てたい姿」を写真に収め掲示することで園児や保護者に啓発するとともに、学級経営の評価と指導に役立てた。 ○指導計画の反省と実態に合わせた見直しを都度行い、常に園児の実態を踏まえた教育を行うよう努めた。	4	4	○2学年のみの在園となることで生じる課題に向かい、小規模園のよさや課題の捉え直しを行い、学年の目標を踏まえながら、一人一人の発達課題に即した指導を心がける。 ○たくましさや人との関わりを補うため、多様な経験をさせる。そのために、地域の教育資源（ひと・もの・こと）も積極的に取り入れ、地域社会とのつながりを意識した学年・学級経営を行う。
	②幼児理解	教職員は、一人一人の幼児の発達の姿から課題を捉えて保育を行っているか。	○3学年混合の1学級となり保育実践の難しさがある中、一人一人のよさや課題など、ありのままの姿を丁寧に見つめることを大事にして、異年齢の中での育ち合いを踏まえた保育を行った。 ○職員終礼などを利用して日頃から幼児の姿について語り合い、課題の捉え方や指導方針について共通理解し、職員が一体となって保育するよう努めた。短時間勤務の預かり保育補助員などとの連携や指導方針の共通理解に課題が残った。	3	4	○園児一人一人の課題を全職員が共通理解し、担任を中心に一体となった指導を行うよう努める。園児に関する情報が常に話し合われるよう心がけ、必要に応じて「子どもを語る会」を行い指導方針を確認する。 ○預かり保育補助教諭など短時間勤務の職員との連携・共通理解のため、指導方針や援助の仕方等を具体的に示す。
	③特別支援教育	特別な支援を必要とする幼児の実態や課題を明確にし、計画的・組織的に指導を行っているか。	○管轄の通級指導教諭と連絡を取り合い、助言を踏まえながら保育にあたった。配慮が必要な子供について、園内で情報共有したり、支援について検討したりしてきた。担任と補助教諭は、必要な援助を見極めながら、きめ細やかに支援を行っている。	3	4	○必要に応じてその都度、話し合いを行っているが、計画的・組織的な支援のために、定期的な話し合いの場を設け、より綿密な体制作りを行う。 ○保護者との連携を担任に任せるだけでなく、必要や要請に応じて、他の職員も関わっていくようにする。今後も保護者や小学校との連携に努め、園児や保護者にとってよりよい支援に繋がるよう体制を整えていく。
	④人権・同和教育	教職員は、自らの人権感覚を磨き、幼児に人権意識の芽生えを培うように配慮しているか。	○職員研修や保護者研修などを通して、自尊感情を高めるための援助について学び、園児一人一人の姿や思い、課題を丁寧に捉えた援助を心がけた。 ○人権・同和教育を視点とした保育公開や研修会を行い、指導員や地域の方、保護者や他園の職員を招いて、保育の質や職員の意識の向上を図ることができた。	4	4	○職員自身の人権感覚を一層磨くために、積極的に研修に参加するなど自己研鑽に努める。更に、自分だけで留めず、園内で発信・共有し、よりよい職員集団の形成に努める。 ○一人一人の姿を肯定的に捉える温かい眼差しで園児を支え、課題を捉えた進路保障に努めると共に、一人一人の自己肯定感や他尊感情を高めていけるように努める。
	⑤行事	教職員は、行事を幼児の発達を促す機会と捉え、工夫、改善しているか。	○園児数が減少し、3学年混合学級となったものの、経験させたいことや一人一人の育ちを大事にしながら内容の工夫に努めた。 ○「幼児期の終わりまでに育てたい姿」を指針とし、各活動の中で、学年毎のねらいを明確にして援助することで、学年集団としての発達を促す機会にできた。	4	4	○次年度は更なる園児数減少が見込まれるが、園の実態を踏まえつつ必要な経験や育ちにつながるよう、その都度内容を工夫する。必要に応じて、地域にも協力をお願いし、育ちに必要な経験ができるように工夫する。 ○行事に至るまでの過程を大事に支え、園児の意欲や努力の様子などを評価することで、自己肯定感を高めたり新たな目標に向かわせたりするよう努める。
	⑥保幼小連携	近隣の小学校等との連携を密にし、なめらかな接続に努めているか。	○人権・同和教育研究指定事業との関わりから、会合を中心に保幼小中連携（縦のつながり）や保幼連携（横のつながり）の機会が増えた。 ○交流活動に積極的に参加したり、カリキュラムについての協議を行ったりして、近隣の保育所や小学校との連携に努めた。特に、小学校とは、運営協議会での話し合いをきっかけにして昼休みの交流活動が開始されるなど、小学校側の協力によって連携が一層進んだ。	4	4	○職員研修等に積極的に参加し、情報交換がしやすい関係作りに努める。 ○交流活動を近隣の保幼小に働きかけ、同年代や異年齢の友達と関わる機会を積極的に作る。 ○年長児には、就学が楽しみになるよう園生活の中で話をしたり、小学校の段差を楽しみに入学していけるよう日頃から一人一人の課題を捉えて支えたりする。
家庭・地域との連携	⑦家庭・地域との連携	幼稚園と保護者、幼稚園と地域（未就園児等）との協力関係はできているか。	○保護者には日々、送迎時に情報交換をしたり、連絡ノートや写真掲示で子供の様子や育ちを伝えたりした。また、クラスだよりや園長だよりを通して集団の育ちや大切にしている担任の思いなどを発信してきた。定期的に伝えることで、保護者も家庭で話題にされ子育ての参考にしてくださることが多かった。 ○日頃から、地域の方に積極的に声をかけたり、運動会や作品展などに招待したりして園の様子を知っていただく機会を設けて協力のお願いに努めたところ、新たな活動が生まれるなど連携が広がった。 ○地域回覧用の園長だよりは発行回数を増やした。地域連携の様子や幼児教育に関わる記事を載せることで、本園教育を広報するとともに幼児教育の啓発にも努めた。	3	4	○地域の方の協力を仰ぎながら、ひと・もの・ことと関わる機会を増やし、園内だけでは不足する教育的刺激を補ったり、活動への招待などで発表や表出の場を作ったりする。 ○ホームページを定期的に更新し、写真を活用して園の教育活動を保護者や地域の方に発信する。
研修	⑧研究・研修	教職員一人一人が、園内外の研究・研修の機会を自己研鑽の場として受け止め、進んで研究・研修に取り組んでいるか。	○人権・同和教育研究指定を受け、園の実態や課題を踏まえた取組を行った。日々幼児一人一人の育ちについて語り合い、日頃の保育に生かすよう努めた。また、指導員や地域の方、他園の職員を招いて保育研究会を開催したことで、職員研鑽の機会となった。 ○市幼稚園教育研究会の研修会などに積極的に参加し、自己研鑽に努めた。	3	4	○人権・同和教育研究指定を受けて、保護者や地域、保幼小中との連携を堅実に行うために、園の取組の充実と発信に努める。 ○2学年混合学級の少人数保育の在り方を探究し、教育活動の充実に努める。 ○研究職員会を定期的に行い、保育の質の向上に努める。また、指導員を招いた園内研究会を行い、職員集団として研鑽に努める。
組織運営	⑨園務	教職員は、他教職員と協働し、計画的に園務を遂行しているか。	○各自が、まず自身の園務を遂行するよう努めた。また、計画案の段階で、起案者が役割を職員全体に割振り、負担が偏らないよう分担して進めた。 ○告知板を活用したことで、優先すべきことや協力が必要なことなどが周知され、協力体制が強化された。	3	4	○園務分掌の偏りを少なくしたり、行事が一時に集中しないようにしたりする。 ○日頃からコミュニケーションを取り、相談しやすい人間関係に努める。 ○計画的に業務が進んでいるか中間で確認し合い、停滞気味な箇所は分担を見直すなどして協力し、スムーズな遂行に努める。
安全管理・保健管理	⑩危機管理	園の危機管理及び幼児の安全や衛生の管理体制を全教職員が理解し、適切な対応に努めているか。	○毎日の感染症対策を徹底したり、保護者から情報収集したりしながら、感染拡大防止に努めた。 ○避難訓練や引き渡し訓練、防犯教室を実施し、園児の安全意識を高めたり、職員の対応力を高めたりすることができた。 ○毎日の生活の中で気になることを、その都度職員で共通理解し危険防止に努めた。また、ヒヤリハットやニュース等の事例を話題にし、本園での対応を顧みるようにした。	3	4	○一層、保健衛生に努め、感染症のまん延防止を図る。 ○長時間の預かり保育時間なども踏まえ、いろいろな職員体制時を想定した危機対応について検討、訓練し、有事に備える。
教育環境整備	⑪園地・園舎・遊具等の施設・整備	園地・園舎・遊具等の施設・設備を定期的に点検し、必要な改善・管理を行っているか。	○普段から異状がないか気を配るとともに、月1回の安全点検箇所をローテーションにして多数の目で行うことで安全管理に努めた。 ○危ない箇所については、園児・職員へ周知徹底し、修繕要望を出したり、修繕を迅速に行ったりした。	3	4	○日々の清掃活動や整備活動の中で、全職員協力して危険個所の早期発見に努め、早期修繕を行う。 ○引き続き、毎月の安全点検を行うとともに、違う目で、点検箇所の確認ができるよう、安全点検をローテーションで行うなど工夫して実施する。また、学期に1回程度、子供と一緒に点検することで、子供目線を活用するとともに、子供自身の安全・危機管理意識を醸成する。

※評価基準　４：十分達成している　３：概ね達成している　２：改善を要する部分がある　１：大いに改善を要する